

第一歩のための第一歩

米子北斗中学校 三年 片岡 彩希

もっと知らなければ。

松本京子さんのご兄弟、松本孟さんと、横田めぐみさんのご兄弟、横田拓也さんのお話を聞いて一番にこう思った。

私はこれまで、昔、北朝鮮に拉致された人がいてまだ日本に戻れていない人がいる。それがわかっていけば、拉致問題について理解できていると思っていた。しかしそれは大きな思い違いだった。

今年八月に中学生サミットに参加した。横田さんは「もしめぐみちゃんが帰ってきたら、まず『ごめんなさい』と謝りたい。『おかえり』はその次だ」とおっしゃった。私はそれに衝撃を受けた。なぜなら今年六月、松本さんが学校での講演で「おかえりと言いたい。それだけだ」とおっしゃっていたからだ。その切実な思いが心に残っていたため、サミットに向け拉致問題について考えているときも「助けられていない自分たちに責任がある」と思ったことがなかった。しかし、確かにそうだ。いくら北朝鮮が拒否しているからといって、自分には何もできないと諦めていいわけではないのだ。

被害者家族の方々は、誰よりも家族が帰ってくることを望み行動しているはずなのに、四十年以上年月が経っても満足できる進展がほとんどない。そんなもどかしさをひしひしと感じ、より一層、今、自分に出来ることをしようと決意した。

サミットで私たちのグループは、「被害者は拉致された方だが、そのご家族も同じほど辛さを抱えているのではないか」ということについて話し合った。悲しい、寂しい、怖い、そして会いたい。このような感情は拉致された方もご家族も、どちらもずっと抱えているのではないだろうか。例えば私が、休みの日に友達に会って話したいと思ったとき、お互いが会いたいと思えば会うことができる。でも、それができない。自分の日常に重ねてみると、同じ思いを持っているのに通じ合えない苦しさを痛いほど感じた。

お二人の率直な思いを聞き、ここで終わってはいけない。もっと知らなくてはと強く感じた。拉致問題という深刻なイメージに躊躇い、なかなか一歩踏み込んでみようと思えないかもしれない。でも私がそうだったように何かきっかけがあれば詳しく知り、解決に繋がる行動をしようと思えるのではないだろうか。私は十一月に米子で開催された政府主催の拉致問題についての国民の集いで発表を行った。身近な人はもちろん、より多くの人に決して昔のことではない拉致問題の現状や、ご家族の思いを伝えた。そのような方法で、躊躇ってしまっている人が第一歩を踏み出すための手助けになればと願った。それがその時の私にできることだった。そして、これから今私の何が出来るのかを探し続けていく。